

奈良県立大学学術研究員 研究成果報告書

研究課題（和文）：

日米における「他者」に対する視線—ナンシー・梅木にみる日本のアメリカ性の表象とアメリカの日本人表象を例に

研究課題（英文）：Gaze at “Others” in Japan and the US: the Representation of America-ness in Nancy Umeki’s Coverage and Japanese-ness in the US media

研究代表者名：岡井崇之

学術研究員名（所属先）：俣野裕美（奈良県立大学客員准教授）

1. 本研究の概略

本研究は、敗戦から占領期を経た日本社会が、1950～60年代にかけて日米両国で活躍した、歌手で女優のナンシー・梅木をどのように捉えていたかについて分析するものである。

「アメリカの恋人」と称され、東洋人初のアカデミー賞を獲得するなど、「アメリカ性」を背負った女性に対するメディア表象を明らかにすることを通して、社会が彼女に向けていた視線を考察した。

またサブテーマとして、アメリカのメディアにおける日本人表象について研究を行った。あからさまな人種的偏見やステレオタイプ描写が減少傾向にある現代のアメリカ映画において、他者とされてきた日本人や日本文化の表象形態を明らかにする研究を行った。

メインテーマもサブテーマも、「他者」と位置付けられた人物を社会がどのように眼差すかという点に主眼を置いている。

2. 本研究の内容

ナンシー・梅木（以下、梅木）に関する研究については、報道された新聞、雑誌記事を収集して分析を行った。ジャズシンガーとして日本でデビューした当時から渡米して人気を獲得し、映画『サヨナラ』（1957）でのアカデミー賞獲得や舞台出演、アメリカ人男性との結婚と離婚、芸能界引退の直前までの表象の変遷を追った。

サブテーマに関しては、「サムライ」をテ

マに研究を行った。アメリカのメディアでは従来から日本人をサムライとして描くことが多い。しかし近年では、日本人だけでなく、白人などの非日本人が、作中の中でサムライになる事例が生まれている。こうした日本人以外によって担われる日本人性がどのように表象されているかについて分析した。

3. 本研究で明らかにしたこと

デビュー当時の梅木は、当時流行していたジャズ界の期待の星として、可憐で謙虚な歌手として報じられていた。日本を離れて渡米してもなお継続して梅木の動向が伝えられており、日本人が海外で成功を収めていることに対して基本的には大きな関心を寄せ、称えていることが分かった。

さらに記事を分析すると、彼女について言及する際、「ヤマトナデシコ」や「日本ムスメ」等という「日本」と「女性」に関連する言葉が多用されていた。そしてこれらの言葉は、以下の3つの文脈で語られていた。1つ目は、梅木がアメリカ社会の望む従順な日本人女性像を体現していることへの不満と疑念、またこのような女性像を好んで消費するアメリカ人男性に対する優越感である。2つ目は、梅木が活躍している理由を、日本人の血筋、日本の文化に求めるものである。3つ目は、仕事での成功や結婚など、日本から離れてアメリカ社会との結びつきを強める梅木への批判である。

これは、梅木がインタビューや寄稿記事などで、アメリカのスターとして自らを語ったのとは逆の方向性である。また、同時期にアメリカから日本へ拠点を移した早川雪洲が、「国際派俳優」としての立場を築いたのとも対照的な状況である。

戦後、敗戦と占領によってナショナル・アイデンティティを傷つけられ、その屈辱感から、日本人男性はアメリカ人と密接な関係を持つ日本人女性に敵意と憎悪を向けたといわれている。こうした戦後のジェンダーを巡る社会的関係が、梅木を「ヤマトナデシコ」や「日本ムスメ」という言説に閉じ込めることに繋がったと考えられる。

本研究員の応募時には、アメリカでの資料収集も予定していたが、新型コロナウイルス流行のため、渡航ができなかった。今後は、ア

メロカ側からみた梅木の表象についても考察を深めたい。

日本表象の研究に関しては、日本人以外の主人公が作中でサムライへと変容する映画、『ラストサムライ』(2003)、『キル・ビル vol. 1』(2003)、『ウルヴァリン：SAMURAI』(2013)、『47 RONIN』(2013)の4作品を選定し、表象分析を行った。

主人公がアメリカでの人生を捨ててサムライとして生きることを選択する例や、目標を達成するためにサムライの精神を取り入れて戦うなどの例が見られた。しかし、主人公がサムライへと完全に変容を遂げる描写は避けられていることが分かった。彼らは、日本人のサムライ達とは第三者的な立場を取って俯瞰する位置にいたり、サムライ化を果たすと同時に死んでしまったりするなどの形を取り、日本人に完全に同化することはなかった。他者である日本人性に極限まで近づきながらも、最終的な局面では、慎重に管理されていることが分かった。

また、2000年代と2010年代の映画では、サムライ化の程度に差が見られることが分かった。後者よりも前者の方が、よりサムライへと近づく描写がなされていた。前者と後者の時代では、アメリカの外交政策の重要課題が、中東地域からアジアへと移った。これにより、後者の時代では、日本人への接近に対して否定的な感情が生じ、サムライ化の度合いが減少した可能性があることを指摘した。

4. 本研究の諸成果

〔セミナー、シンポジウム等〕

『『他者』に対する視線—ナンシー・梅木にみるアメリカ性の表象』(2022年3月29日 於奈良県立大学)

〔図書〕

『米国映画の中のアジア系の人びと』、『メディア用語基本事典[第二版]』、世界思想社、2019年5月、p.247-248(事典の一項目として担当)

〔雑誌論文〕

『不完全なサムライたち—現代ハリウッド映

画が描く、非日本人によるサムライ化の分析—』、『撰大人文学』27号、2020年1月、p.19-37

〔学会発表〕

『日米の間に揺れて：日本の雑誌、新聞記事におけるナンシー・梅木の表象』、カルチュラル・タイフーン2019(2019年6月 於慶應義塾大学)

〔その他〕

梅木の出身地である北海道の市立小樽図書館では、梅木に関する資料や書籍の収集、研究会、市民向けのイベントを開催している。同館と連絡を取って情報交換を行っており、今後引き続き連携しながら、研究を進める予定である。

5. 外部資金(科研費を含む)事業への申請予定等の今後の展開について

日本学術振興会へ科学研究費の申請を行ったが、採用には至らなかった。本研究員として得られた知見を基に、今後も同振興会へ申請を続ける予定である。また、笹川科学研究助成など、人文・社会科学系の財団への申請も視野に入れている。

メインテーマの研究対象である梅木は、歌手や女優として様々な快挙を達成したにもかかわらず、関連資料に乏しく、彼女の足跡は広く一般には知られていない状況にある。今後は収集した資料を元に、彼女のライフヒストリーを書籍の形で出版することも模索したい。